



の競技を競いました。場内には、住民と少年たちが肩を寄せ合って喜びあう姿や絶えない笑顔が見られ、子どもたちの歓声が飛び交っています。

「宮城地区には、少年たちを前途有^{ゆうい}な若者ととらえる姿勢があつて、それが、子の代、孫の代と伝わっている。親がそういう姿勢を言葉じゃなく、背中で教えているんです。小さなころに信頼感が身に付けられなかった少年たちは、確かに時間にかかるかも知れないけど、その埋め合わせはできないことはない」と、ここで実感しました。

秋空にはためく万国旗の下、大平さんは希望を見つめています。



開始から約1時間後、青空が広がってきました。

お兄ちゃん。さよなら

大平さんは有明高原寮に1年勤務した後、再び全国の施設を転任。愛知少年院長を最後に定年退職し、平成7年に思い出の赴任地である有明宮城地区に戻り、居を構えます。そして今年の運動会は、公民館長として住民側の立場で参加しています。

また現在でも、少年たちの社会復帰を支えるボランティア「篤志^{とくし}面接委員」として、月に一度施設を訪れ、少年たちの悩みを聞いたり、相談に応じたりしています。

「以前、運動会が終わってか

ら、ある少年と面接をしました。その少年はこんなことを言っていました。『運動会の終わりに小さな子から、お兄ちゃん。さよなら』と声をかけられたことが僕はすごくうれしかった』と。

大平さんは、この少年が感じたものは、普通の人が感じるようなものではないと考えています。

「小さなころから親の愛情に恵まれず、生きるプロセスにおいて『あなたはだめな子、いけない子』とさんさん否定されて育ってきた。自己表現する場所がないから暴走族などに入つて、『オラオラ、おれは今輝い

ているぞ』と自己表現する。彼らの中には、自分はだめな人間という思いがあつて、それを認めるのは苦しいから大きく見せようとするんです。自分の満たされない思いの裏返しなんです。自分はどうなつても良いと思ひ、自分を傷つけ、人も傷つけた少年たち。そうであればこそ、『お兄ちゃん』なんて言われたのがうれしかったんです。私にはよく分かります」。

言葉でなく

そして、幼い子がなぜ、少年に「お兄ちゃん。さよなら」と言えたのか。その背景にある意味が大きいと大平さんは話します。

「もし、その幼い子のお父さんやお母さんが『あそこの人たちは悪いことをしたから近づいてはいけない』と教えていたら、そんなことは言えないでしょう」。

運動会はこの日、宮城地区100戸余りの住民が参加。20人ほどの少年たちと混合チームをつくり、2人3脚、綱引きなど

握手

面会に来てくれた父さんと母さんと生まれて初めて別れの握手をした父さんの手は冷たく

母さんの手は震えていた父さんの涙を初めて見た反発ばかりの母さんに

「頑張るよ」と素直に言えた何かが変わったと思った渡り廊下で空を見ると

青空に白い雲が浮かんでいた涙が止まらなくなった

父さん

母さん

ごめんなさい

